

9月15日

関三山

藤村 敏幸

山名	関三山	山行名	例会		
ルート	関宿見学→ 観音山 → 筆捨山 → 羽黒山				
山行日	令和2年9月15日	天候	晴れ		
参加者	CL 藤村 SL 西川 洋 木元 秋山 河野 上田 大林 伊藤多恵子 倉光				
		コースタイム			
		地名	時：分	羽黒山着	14:10
		観音山着	11:00	関ロッジ着	15:00
		筆捨山着	12:45		
<p>低山だけではものたりないと思い古い町並み見学をセットして企画した。関宿は東海道宿場町の中で最も往年の面影を残す町であるが、道が舗装され、砂埃もなく整備されすぎており残念であった。坂道から見る町並みは少年時代に見た懐かしい昭和30年代の面影があった。</p> <p>低山と思い事前にルートも確認せずYAMAPで山行に臨む。関ロッジから登ろうとするがYAMAPの指す所に登り口がなくウロウロする。登り口は思いもしない急登階段の道で、まさか最初から急登かと戸惑う。登り初めてからも道が幾つも分かれており、どの道がYAMAPの示す道が分らず進みては戻りを何回も繰り返す。途中岩の窪みに鎮座する観音石仏を何カ所も見ると。稜線の展望台からシャープの亀山工場が見えた。山の名前の通り観音様が多く祀られた信仰の山である。観音山から下りもまた道が分らず、最後はYAMAPの指す道とは違う道を降りるが無事に公園の周回道路に出る。ほんの700m程の距離であるが1時間以上要する。筆捨山への道は尾根筋の東海道自然歩道でよく整備され道幅も広く、道標もところどころにあり楽に歩けた。ただ林の中の歩行で全く眺望はなかった。羽黒山への分岐を通ると、一気に長い下りがあり、その後は低山とは思え急階段を登り姥捨山ならぬ筆捨山に到着する。標識は286mと示されており、嬉しさも半減である。昼食時にヒルに吸われた人が2人いた。この時期はもういないと思っていたが、やはり鈴鹿山系である。</p> <p>ここまでくれば行程の6割は終り、あともう少しでこの日の山行も終りになると思い、羽黒山分岐まで戻る。分岐からは急に道が狭く、起伏の多い道になる。入山者が少なく踏み跡を見つけるのが難しく、どこに目印の赤いヒモがあるか探しながら前に進む。踏み固められていそうな道を暫く行くと急に道がなくなり、YAMAPを見るとルートから大きく外れていた。皆で来た道に戻りあちこち探し、ようやく地面に置かれている15cm角程度の板に羽黒山と記された道標を見つける。誰でも見落とすほど小さく目立たない道標である。そこからは里山らしからぬ急斜面を歩行したり、岩の上を通過しようとするが鎖もなく前に進めず、また戻り岩の下を大きく迂回したり、そして最後に一人がやっと通過できる岩穴くぐり、と危険な道が続いた。岩穴を抜け幾つかの小ピークを越えて羽黒山の頂上に着く。頂上には標識がなく三角点の印だけであった。あとは緩やかな下りで杉林の中を歩き鳥居を潜り登山口に着く。正法寺山荘跡前を通り、1時間ほど道路を歩き関ロッジに戻る。リビングホテルで入浴後帰路につく。参加者の皆が里山歩きで今日は楽勝と思っていたが、道迷いをしたり、幾つもの急階段の登り降りをしたり、おまけに岩穴潜りまである疲れる山行であった。帰る途中に、「道迷いもあり、辛い登り下りもあるが、楽しく思い出に残る山歩きであった。」との声を聞き慰められた。</p> <p>ヒヤリハット 道迷いが多数あったが、軽度なのでヒヤリハットとはしない</p>					

関三山感想

日中の暑さも和らいできた 9 月に心惹かれる例会が。東海道五十三次、47 番目の関宿散策と 200 m 級の低山歩き。この三山、観音山、筆捨山、羽黒山と、どれも立派な名前ですね。

まずは、江戸時代の趣を残している古い街並みを散策。朝の静けさの中、まだ歩く人もまばらだ。近くに見える山並みは低山なのに鋸状で、そう言えば広重の「坂之下」(48 番目の宿場町)には、目前に急峻な山々が描かれていたっけ。それが筆捨山であるそうだ。

一つ目の観音山周辺は公園になっていて、何本もの道が。気が付けばそこが頂上。観音山を過ぎて、迷いながら筆捨山への登山口を発見。そこからは一本道の東海自然歩道を辿る。とは言え、階段の急坂が続くなど、意外にも多いアップダウンに息がはずむ。筆捨山で昼食休憩。ここでヒルに献血してあげたお二人、ご苦労様！ 3 つ目の羽黒山への道は途中に巨岩が多く、迂回ルートを見失うことも。滑りやすい斜面を引き返したり、回り込んだり。最後は岩のすき間を苦労しながらすり抜けるというアドベンチャーな気分を味わう。低山侮るなかれ！ の声があちこちで上がりました。全員初めての山を、みんなであっちへウロウロ、こっちへウロウロ、楽しかったなあ～！ 伊藤多恵子

